

『苔の衣』 「夢路におぼる」 考

安道 百合子*

【要旨】 中世王朝物語の一作品『苔の衣』には、「夢路におぼる」という他に見ない用例がある。どうしてこのような用法に至ったのか、中古中世の物語文学を中心に「夢路」「おぼる・おぼほる」の用例を検討し、考察した。その結果、中世王朝物語の多くは、『源氏物語』の〈禁忌〉の恋のテーマを受け継ぐものの、「夢路」を密通の喩として用いたのは『狭衣物語』が始発であることを確認した。『苔の衣』の「夢路」も『狭衣』の影響ととらえるべきだろう。一方、「おぼる」は、中世以降の「何かに熱中する・ふける」などの意味ではなく、中古以来の涙に「おぼほる」から派生した語と見るほうがよいと考えるに至った。

【キーワード】 『苔の衣』 中世王朝物語 夢路 おぼる

はじめに

中世王朝物語の一作品『苔の衣』に、「夢路におぼる」という表現がある。第四巻、兵部卿宮がかねてより想いを寄せていた春宮女御に密通する場面で、女御の心境を「夢路におぼるる心地」としている。一般に、「夢路」は「たどる」ことや「まよふ」ことが多い。「おぼる」に接続することは考えにくく、事実「夢路におぼる」という用例は他の作品に見えない。一方、『徒然草』に「名利におぼれて」という用例があるように、中世以後「おぼる」には何かに熱中して心を奪われる場合の使用がある。『苔の衣』が、なぜ「夢路におぼる」という表現を選んだのか、考えてみたい。中世王朝物語は、『源氏物語』の強い影響下にあり、中古の語彙用法を多く引き継ぐ一方で、中世の語彙用法が混じっており、成立時期や作者の周辺文化圏を考察する材料になると考えるからである。

1. 『苔の衣』の「夢路におぼる」

『苔の衣』は全四巻の物語で、『風葉和歌集』に作中歌が採られていることから、成立は1271年以前であることが知られる¹⁾。当該場面は、第四巻にあたる冬の巻において、兵部卿宮がかねてより慕っていた東宮女御に無理やり迫る場面である。

令和3年11月1日受理

*あんどう・ゆりこ 大分大学教育学部言語教育講座 (古典文学)

〔用例1〕誰も誰も皆々寝にけり。(兵部卿宮)「嬉し」と思すに、心騒ぎしながら几帳の後ろの方より入り給ひぬれど、日ごろの苦しさにや女御もよく寝入り給ひて咎むる人もなければ、やをら御衣を引きのけて添ひ臥し給ふにぞ、うち驚き給ひて、怪しと思したるに、紛るべくもなき御気色なればいと心憂くあさましくて、声もたてつばかり泣き惑ひ給ふを、(兵部卿宮)「理ながら、またかくまで思ひ疎み給ふべきことかは」とめざましくさへ覚え給ふに、我が御心も鎮め難くて、思ひ遣りなきやうにもてなし給ふを、女御はただ夢路におぼる心地して、たけきこととは泣き悲しみ給ふさま言はんかたなし。例の限りなき言の葉を尽くしつつ契り語らひ給へど、いとどかくまで近づき奉りぬることの心憂さに、ただ時の間にも消え失せなまほしく覚え給へど、何のかひかはあらん、日ごろよそよそに思ひつるよりも今ひとしほの近まさに(兵部卿宮)「またはいつかはかばかりの夢の中の対面も」と思し続けるまに、今一際思ひ添ひぬる心地して、二つ涙に溺れ給ふさま御身も浮きぬべし。(218頁)²⁾

女御は突如添い伏してきた男が「紛るべくもなき」兵部卿宮であることに気づき、あからさまな驚きと不快感を感じ「声もたて」んばかりに泣き惑う。対して兵部卿宮は、ここまで疎まれることかと心外にすら思っており、あまつさえ、女御を慮ることのない暴力的な密通場面となっている。そのときの女御の気持ちが「夢路におぼる心地」である。

実はもう一例、この密通の結果、女御は懐妊し、兵部卿宮そっくりの若宮が誕生したあとに女御が兵部卿宮との運命を歎き悲しむ場面にも、「夢路におぼる」用例がある。

〔用例2〕(女御)「なほいと心憂かりける契りかな」と悲しう、「さばかり思し掎てたることの、春宮などもあらまほしくのたまふに、安らかに分くかたなく心清きことにもなくて、夢路におぼれられし験によくしも紛れ所なきさまを、さばかり心うるはしくもの恥づかしげなる御心掎てに、おのづから心得給ふこともや」など、とにかくに思し結ばれ、「長らへて過ごさば、心よりほかにこれより後もかかることもや」と思すに、かねて水の泡とも消えなまほしく思さる。されど、かばかりなる契りは、さすがにこの世一つならず思し知られける。(227頁)

ここでも女御は、兵部卿宮との密通を、なさけない不本意な運命(「心憂かりける契り」ととらえており、「夢路におぼれられし験」、すなわち密通の証拠として紛れようもなく兵部卿宮に似ているわが子の顔を認めているのである。「夢路におぼれ」が用例1の密通を指し示すことは疑いないが、「夢路におぼれし」とありたいところであり、文法的には疑問を感じざるを得ない。管見の限り「おぼれられし」本文が多いが³⁾、受身の助動詞「られ」と解して「おぼれさせられた」とするにしろ、自発の助動詞「られ」と解して「自らおぼれてしまった」とするにしろ、不審が残る。何らかの誤写を想定したほうがよいのかもしれない。ひとまず、その不審については追及せず、少なくとも「夢路におぼる」という固有の例があることに注目して考察を進めたい。

さて、これらの例における「夢路におぼる」は密通をさしていると思われるものの、そこには、男女の逢瀬にまつわる甘美なイメージは全くない。兵部卿宮のほうが一方向的に喜びの「夢」ととらえているにしろ、女御の側から見ればむしろ悪夢とでも言うべき明らかな不快感や悲し

みを抱えた体験であり、[用例1]の破線部「一つ涙に溺れ給ふさま御身も浮きぬべし」とあるように、悲嘆の涙に泣きぬれているのである。[用例2]でも「かねて水の泡とも消えなまほしく」と水の泡のように消してしまいたい気持ちが表出している。「夢路におぼれ」た結果の、こうした表現は、「おぼれる」から連想される水や涙のイメージを引き寄せたかのようでもある。

2. 「夢路」の意味変容

そもそも「夢路」という言葉にはどのような意味があるのだろうか。小学館の『日本国語大辞典』⁴⁾には「夢の中の道。特に、夢の中で恋しい人のもとに通う道。また、夢に見ること。夢のみち。夢の通ひ路。」とあり、『古今集』574番歌「夢ぢにもつゆやおくらむよもすがらかよへる袖のひちて乾かぬ」(恋二・貫之)⁵⁾を挙げる。また『歌枕歌ことば辞典増訂版』⁶⁾は、

現実に逢えない男女が、あるいは現実に逢ってもなお逢いたい男女が「夢で逢いたい」とよむ発想は、すでに『万葉集』からあったが、平安時代に入ると、「恋ひて寝る夢路にかよふ魂のなるるかひなくうとき君かな」(後撰集・恋四・読人不知)のように、魂が「夢路」をたどって相手に逢いに行くという表現が一般的になった。

と解説し、『古今集』の恋歌の用例を複数挙げたうえで、用例の変遷について

ところで、「夢路」という歌語は、『古今集』で五例、『後撰集』で八例と数多くよまれたが、その後は急に減少して、『拾遺集』ナシ、『後拾遺集』一例、『金葉集』ナシ、『詞花集』一例、『千載集』ナシ、『新古今集』三例というようにほとんど用いられなくなってゆくのであるが、『新古今集』の場合は「衣うつみ山の庵のしばしばも知らぬ夢路に結ぶ手枕」(秋下・公経)「うたたねは萩吹く風におどろけどながき夢路ぞさむる時なき」(雑下・崇徳院)のように「夢」とほとんど変わらぬ意で用いられ、夢の中で人に逢う通路の意はなくなっているのである。

と指摘している。歌語「夢路」に男女の恋路をなぞらえる発想は、意外と平安初期の短い期間、しかもそう多くない歌数に見られることが確認できる。また、同義の「夢の通ひ路」のほうは、敏行歌「住の江の岸による波よるさへやゆめのかよひち人めよくらむ」(初出『古今集』559番歌)が『百人一首』にも入って有名だが、その後の用例はふつつりと途絶えた感がある⁷⁾。

では、散文作品においてはどうかだろう。『蜻蛉日記』には、

大門引き出づれば、乗り加はりて、道すがら、うちも笑ひぬべきことどもを、ふさにあれど、夢路かものぞ言はれぬ。(252頁)⁸⁾

と、鳴滝籠りから兼家によって強引に連れ帰られる場面一例ある。兼家が大声で冗談を数多く(「ふさに」)言うのに対し、道綱母はものを言えない。茫然と下山させられるこの帰り道は「夢路」であろうか、と山路を夢路になぞらえている。ちなみに、「夢の通ひ路」と言う言葉も一例(その後、夢の通ひ路絶えて、年暮れはてぬ。318頁)あり、こちらは、兼家との夫婦生

活がすっかり無くなったことの臙化表現と解される。

『紫式部日記』には、里下がりをしていた式部が、宮中に帰参するにあたり、かつて同じ日に初出仕したときの心持ちを思い出す場面にある。

師走の二十九日にまゐる。はじめてまゐりしも今宵のことぞかし。いみじくも夢路にまどはれしかなと思ひ出づれば、こよなくたち馴れにけるも、うとましの身のほどや (184 頁)

『源氏物語』にも「夢路」は一例しかない。御法巻で、美しい死顔を見せて死んだ紫の上はその日のうちに茶毘に付される。

いとほかなき煙にてはかなくのぼりたまひぬるも、例のことなれどあへなくいみじ。空を歩む心地して、人にかかりてぞおはしましけるを、見たてまつる人も、さばかりいつかしき御身をと、ものの心知らぬ下衆さへ泣かぬなかりけり。御送りの女房は、まして夢路にまどふ心地して、車よりもまろび落ちぬべきをぞ、もてあつかひける。(④511 頁)

桐壺巻で桐壺更衣が亡くなったとき、その母は、亡骸が灰になるのを見届けようと気持ちを強く持って付き添おうとするが、衝撃のあまり「車よりも落ちぬべうまろびたまへば」とあった。御法巻の例も、光源氏が「空を歩む」心地で人に助けられているのに次いで、野辺送りに付き添った女房達の悲嘆にくれる気持ちが「夢路にまどふ」である。

『源氏物語』を何度も読み親しんだという孝標女が書いた『更級日記』にも、同じく、野辺送りの場面に用例がある。

二十三日、はかなく雲煙になす夜、去年の秋、いみじくしたてかしづかれて、うち添ひて下りしを見やりしを、いと黒き衣の上にゆゆしげなる物を着て、車の供に、泣く泣く歩み出でてゆくを、見出だして思ひいづる心地、すべてたとへむかたなきままに、やがて夢路にまどひてぞ思ふに、その人や見にけむかし。(357 頁)

この直前、夫の死を「夢のやうに」(356 頁)感じて悲嘆にくれた孝標女は、柩の車の供をすゝる息子を車の中から眺めながら、自身も「夢路にまどふ」ように思っている。

ここまでの用例を見て、気付くのは、「夢路にまどふ」心地は、何か強い衝撃を受けたり、極度の緊張状態にあつて、茫然としているときの気持ちであるとともに、実際に何かしらの「路」を辿っているときの用例であるということである。歌語「夢路」は現実には無い「路」を、想像のなかで、歩くものであったが、『源氏物語』までの用例では、実際に歩く(または車に乗って移動する)途中にあつて、茫然としてどこを歩いているのかすらわからないさまを表していると思われる。

平安後期物語においても、「夢路」用例は少ない。『浜松中納言物語』は周知のように「夢」用例が多いが、「夢路」は一例。中納言が吉野の姫を連れ出し、車から降ろす場面である。それまで間近に見たこともない男に、抱かれるように車から降ろされる姫君の心地である。

いとあきらかにみざり寄り、おりむもわりなく、ただ夢路にまよふ心地しながら、おりて

しぶりみたらむもあやしかるべければ、扇に顔ばかりをまぎらはして、あるにもあらず、
みざりおり給ふさま言ふかぎりなし。(333頁)

また『夜の寢覚』にも、一例、内大臣の告白の言葉のなかにある。

つつみ思ひたまへて、ともかくも申し出でむかたなく、夢路にまどふやうにてよそに聞き
なしはべりにしを、片時も思ひ怠らず、胸、心やすからずのみ思ひたまへられしが苦しさ
に、(455頁)

内大臣が、妻の妹、中の君が結婚するという知らせを聞くときの気持ちである。実は、内大臣にとって、中の君とはかつて逢瀬を持ちひそかに想い続けていた女性である。その結婚を妻の手前、まるで素知らぬ風を装って聞く(「よそに聞く」)ときの気持ちが「夢路にまどふやう」である。新編全集では「まるで悪夢の中をたどるような思いで」と訳している。

いずれも、実際の移動というほどの「路」の移動はないが、強いショックを受け正気でいられない気持ちをあらわしていると考えられよう。さらに言えば、この2例になってはじめて強い衝撃の内実が男女の恋愛に関わることには注目される。

さて、同じく平安後期の『狭衣物語』には、まったく異なる用法が見える。

あはれにおぼえて、御しつらひも、夢路に惑ひたまひしおまし所変わ、几帳ばかり立て
たまへる(②162頁)

これまで「夢路にまどふ」は「心地」や「やうにて」などに続くものであり、当事者の茫然とした思いの比喻として使われていた。しかし、ここでは、「おまし所」という密通が行われた場所をあらわす名詞に接続している。つまり、狭衣が「夢路に惑」って逢瀬を持つに至った「おまし所」なのであり、「夢路」は男女の逢瀬の喩として機能していると考えられる。新編全集の頭注は、「夢路」は、女二の宮との逢瀬の比喻。『源氏』若紫巻の光源氏と藤壺の場合など、「夢」は逢瀬の喩によく用いられる。」と指摘する。

確かに『源氏物語』の密通場面に「夢」という語はあらわれていたが、「夢路」ではなかった。「夢路」に惑うのは、親しい人の死に直面するほどの衝撃を受けたときであった。逆にいうと、『源氏物語』以降の物語の「夢路」に、男女の逢瀬がたとえられるようになったのは、『源氏物語』が皇統に関わる〈禁忌〉の恋を描いたからであろう。すなわち、〈禁忌〉の恋は、『源氏物語』を引き継いだ平安後期物語に至って、「夢路」に相応する強い衝撃に値する内実を持ったものと考えられるようになったのである。

3. 中世王朝物語の「夢路」用例

では中世王朝物語においてはどうか。中世王朝物語は、作者・成立年代ともに定まらない作品が多いが、『無名草子』(1200年頃)に言及があるかどうか、『風葉和歌集』(1271年成立)に作中和歌が採られているかどうか、がおおよその成立の指標となる。「夢路」用例は全28例あり、『無名草子』以前の作品では、『在明の別』3例、『松浦宮』3例、『無名草子』1例

である。『無名草子』以後『風葉和歌集』以前では、『あさちが露』1例、『いはでしのぶ』2例、『石清水物語』2例、『苔の衣』3例、『わが身にたどる姫君』4例である。『風葉和歌集』以後では、『あきぎり』2例、『あまのかるも』1例、『恋路ゆかしき大将』1例、『しのびね物語』2例、『夢の通ひ路物語』3例である。便宜上、用例番号を連番で付して以下に示す⁹⁾。

〔『無名草子』以前〕

- 1 『在明の別』(右大将の) 宣ふ御けはひ、またこはいかにと、一つ夢路にのみ惑はれ給ふなかに、御衣の匂ひ、息差しを始め、さはいへど、け近さはいと懐しう、雄々しからぬに、そこら思ひ砕けつる心の果ては、これを憂しとも思ひたどられず。(集成 323 頁)
- 2 『在明の別』(宰相中将) ただいはけなくより思ひ染めて、ただ一節に思ふやうならん人を得て、朝夕みるよしもがな、とそこら惑ひ歩けど、夢路に迷ひし夏の夜の短かさならでは、さばかりの類ひもえ見出でねば、我が宿世心憂く、背き捨て給ひし御心の辛さのみ忘るる世なく、(集成 366 頁)
- 3 『在明の別』(女院→左大臣) 「昔の人を思ひ交し聞えし心は、世の常のかやうのなかにも、なほ類ひなくなんありし。あさましく心憂かりし夢路迷ひしのち、ただかくておはするばかりにこそ、思ひをかけたれば、内・春宮の御上にもまさりてなん、思ひ聞ゆる。…」(集成 388 頁)
- 4 『松浦宮物語』とかくのたまふこともなけれど、ただ夢路にまどふ心地ながら、この得し琴を取りて掻き立つるを見て、もとの調べを弾きかへて、はじめより人の習ふべき手をとどこほるところなく、ひとわたり弾きたまふを聞くまに、(40 頁)
- 5 『松浦宮物語』〈歌〉尋ねても問はばいくかの月日とか迷ふ夢路を人に知られん (105 頁)
- 6 『松浦宮物語』さらぬ人だにあはただしきに、「我は我」と空をのみながむれど、なにのかひなし。月に催されては、いとど群れ来て、悩ましき盃をのみ勸むれば、まことの夢路だに、絶えたるころなり。(129 頁)
- 7 『無名草子』(「寢覚」より) 〈歌〉かけてだに思はざりきやほどもなくかかる夢路に迷ふべしとは などあるほど。(227 頁)

〔『無名草子』以後『風葉和歌集』以前〕

- 8 『あさちが露』今ぞ傍らなる若き者おどろきて、人の御けはひのするに、あやしくて、探り寄れば、「夢路に迷ふ心地するを、今より後、しるべしてんや。誰とか言ふ」とのたまふに、聞き知らずうつくしき御けはひに、何事をかははかばかしく答へきこうべき。(201 頁)
- 9 『いはでしのぶ』抜書本〈歌〉(前斎院) 憂かりけん世々にもさらば消えもせでまたは夢路に何迷ふらん (232 頁)
- 10 『いはでしのぶ』抜書本 たづきも知らぬ山の奥に、月の光ばかりや変はらぬ伏見の里とながめ給ふも、心を痛ましむる色となりにければ、慰まん時の間もなし。まして、夜の夢路に伴ふ猿の声などは、聞きならはず、心細うも覚え給ひつつ、(251 頁)
- 11 『石清水物語』身に魂も添はず、夢路にたどる心地して、はかなき物も手に触れず、ただ人離れたる所にながめ臥して、ありしにまさるもの思ひはせん方なく、この度は少しの御いらへのありしにも、いとどしき恋の持ち夫なり。(187 頁)
- 12 『石清水物語』(伊予守) 「今は、この世の内のけ近さは思ひ絶えて侍れば、身を離れぬ御面

影の忘るる世なく、関守なき夢路にだに、解けて寝る夜なければ」など言ひもやらず、ためらひて、(220 頁)

- 13『苔の衣』 中納言、東面より車にうち乗せ走らかしておはするに、女君は「こはいかなることぞ」とも知り給はず、夢路に迷ふ心地して惑ひ給ふさまことわりにて、心苦しく方々に言ひ慰め給へど今は何のかひかあらん。(102 頁)
- 14『苔の衣』〔用例 1〕
- 15『苔の衣』〔用例 2〕
- 16『我身にたどる姫君』〈歌〉あけぬよの夢ぢにたどる心ちしていつはるくべきおもひなるらん(上 44 頁)
- 17『我身にたどる姫君』(巻二冒頭) 夢路にまどふ心地ながらも、多くすぎにし月日なれど、なほこのほどは、そのことと心得る方なく、あやしき身の有様ぞいふよしなきや。(上 67 頁)
- 18『我身にたどる姫君』〈歌〉(中将→女三宮) わするとてさてとぢむべき夢ぢかはのちの世までも絶えじ逢瀬を(上 113 頁)
- 19『我身にたどる姫君』〈歌〉をろかなる夢路に袖をしぼりきてうきよへだつるあまのはごろも(下 118 頁)

〔『風葉和歌集』以後〕

- 20『あきぎり』宮の中納言は、月日に添へてもののみ悲しくおぼえ給ふに、いと桐壺の御おぼえ、日に従ひて時めき給ふと、世の人も言ひ沙汰するを聞き給ふにも、わが宿世のほど、思ひ知られて、「かかる契りに引かれて、迷ひける夢路にこそ」とおぼえ給ひて、いづ方にもさし出で給はず、ながめ臥し給ふ。(傍線部は野坂本のみ)(85 頁)
- 21『あきぎり』(男君)「…何と言ひても人の咎かはとおぼえながらも、我が踏み迷ひし夢路の闇を知り給はば、あはれとは思ひ給ひけん。生ける世の思ひ出には、今宵ぞ、命長かりけると嬉しき」とて(98 頁)
- 22『あまのかるも』ただあわたたしげなれば、恨むべき方なく、我も心惑ひして、夢路をたどるやうにて帰り給へば、人々まう上らぬさきに、小侍従と二人して、もとの御床に据ゑ奉りて、「いかに…(105 頁)
- 23『恋路ゆかしき大将』かくしつづなほ絶えぬ行き合ひの橋は、まことに夢路にわたすかひなく、帰る朝ごとにまたながらへん事も覚えぬまで沈み給ふ事度々になりぬるに、一品宮の御心ちは、一筋にこの御心迷ひばかりにもあらざりける。(96 頁)
- 24『しのびね物語』御前など、おびたたくひき続きで出で給ふ様、思ふことなくはめでたかるべきことなれども、いづくへゆくやらんと、夢路にまよふ心地して、おはし着き給ふ(37 頁)
- 25『しのびね物語』かたがた思ひ乱れて、御馬にのり給ふに、いづくへゆくぞと、夢路にまよふ心地して、横川といふところへおはし着きたり。(86 頁)
- 26『夢の通ひ路物語』
心にもあらで、はかなき夢路をたどるさまにて、かへらせ給。(集成 200 頁)
- 27『夢の通ひ路物語』
さめぬ夢路をたどるやうになんおぼえはべるを、さてもつれなくながらへ侍ものかなと、(集成 248 頁)

28 『夢の通ひ路物語』

(歌) 哀れしれまよふうつゝのうきことにかでさまさん夢のかよい路 (集成 271 頁)

歌用例を除くと 21 例あるが、ほぼ「夢路」は「たどる」「まよふ」「まどふ」ものである。

恋愛と関わりなく、茫然としたショック状態を表すものとしては、用例 24・25 がある。『しのびね物語』24 は不本意な結婚に赴く男の気持ちであり、また 25 は出家に赴く道中の心情であるから、恋の成就の道とはほど遠く、放心状態に近い。『蜻蛉日記』など平安初期の用例に近いというべきだろう。また、仏教的な発想として、用例 9 冥界の喩としての「夢路」や、用例 19 現世の喩としての「をろかなる夢路」、ただの夢と同義にとらえても良さそうな用例 5 などもある。これには、『松浦官物語』が藤原定家作であることも考えあわせると、歌語「夢路」が、『新古今集』以降、恋愛の「夢路」に限定しなくなったこととも関わり合うだろう。しかし、総じて、中世王朝物語において恋愛に関わる用例が増えるのは大きな特徴と言ってよい。『源氏物語』の強い影響下にある作品群には、悲恋遁世譚と括られることもあるように、源氏と藤壺との不義密通のテーマを引き継いでいるものが多い。登場人物の恋愛の程度や禁忌の重さに違いはあるものの、そこは恋愛物語なのである¹⁰⁾。

ただ、『狭衣物語』が編み出した、密通や逢瀬の喩としての意味が明確に認められるのは、さほど多くない。用例 6 「まことの夢路」、用例 18 「とじむべき夢路かは」、用例 20 ・「迷ひける夢路」、用例 21 「踏み迷ひし夢路」である。これらはいずれも「路」を通して逢いに来る男が主体となって、逢瀬を振り返って「夢路」と認識している。一方、用例 23 『恋路ゆかしき大将』の例は、歌語「夢路」の発想から逆説的に逢えない男女のつらさを描く。夢では逢える（「夢路にわたす」）のに、（実際には逢えないから）甲斐なく朝を迎えると死ぬほどつらい、という恋情の苦しさである。恋の苦悩を「夢路」を使って表しているのは用例 11・12 『石清水物語』も同様である。男主人公は、恋しさのあまり、魂が身にとどまらず「夢路にたどる」気持ちであったり、せめて関守のいない一だれにも邪魔されない「夢路」で逢おうにも熟睡できないと従者に懊悩を語ったりしているわけである。関守は当然『伊勢物語』の連想であり、業平が二条后に通うために「うちも寝ななむ」と願った関守である。

「夢路」が恋情をかなえる装置だとすると、実際に逢瀬を持つとして、手引きを頼むべく気持ちを語るのは用例 8 「夢路に迷ふ心地するを」であり、逢瀬を遂げたものの、追い出されるように帰途に就くときの心情が用例 26 「夢路をたどるやう」である。いずれも、「夢路」は男にとって恋情をかなえるための現実の回路になっているのである。

実際、『苔の衣』においても、この密通は、兵部卿官の側からとらえるときには甘美な「夢」である。〔用例 1〕の後も「またいつかはかばかりの夢の中の対面も (219 頁)」と願っては、「聞く人なかりつる御夢語りを思し出づるに (221 頁)」とひとりで思い出している。また、「兵部卿官、ありし夢の後、今すこし嘆きこり積みつつ (224 頁)」「兵部卿官も、ありし夢の心地を数へ給ふに (225 頁)」のように、男はこの一件を「夢」ととらえているのである。

さて、ここで改めて中世王朝物語の用例を見渡すと、『苔の衣』の用例は他の作品の用例とは同質ではない。「たどる」「まよふ」に接続する例が多いということは、すなわち、何らかの路を、あるいはいま置かれた状態を「夢路」ととらえてその路を「たどる」「まよふ」主体は同一である。ところが、「夢路におぼる」というとき、いわば「夢路」ととらえる主体と、「おぼる」の主体がずれているように思うのである。兵部卿官が幾度もこの逢瀬を「夢」ととらえること

から考えると「夢路」は兵部卿官の願望の結実であるという印象をぬぐえない。けれども、〔用例1〕の文脈から「おぼる」の主体は明らかに女御である。〔用例2〕が文法的に違和感を抱えるのも、このことに由来する。このとき「おぼる」はいったいどのような意味なのだろうか。

ちなみに、『苔の衣』のもう一例の「夢路に迷ふ」（用例13）の主体も女である。ただし、ここは連れ去られる女の心中が「夢路にまよふ」のであり、道綱母の心情や『浜松中納言物語』吉野の姫君の心情などに近い例として違和感はない。

4. 「おぼる」の用例

「おぼる」の検討にあたり、まずは『日本国語大辞典』の「おぼれる」「おぼほる」見出しの項を引用する。

おぼ・れる【溺】〔自ラ下一〕**文**おぼ・る〔自ラ下二〕①水中に落ちて泳げずに死にそうになる。水中に沈んで死ぬ。おぼほる。②あることに熱中して心を奪われる。ふける。くれる。はまる。③うすぼんやり見えたり、または聞こえたりする。かすむ。ほける。

おぼほ・る【溺・惚】〔自ラ下二〕（「おぼる（溺）」の古形）水などにおおい包まれるというのが原義で、そこから物事に夢中になるという意が派生した。①水中に沈む。②（「涙におぼほる」の形で）涙にむせぶ。涙にぬれる。→おぼほれあう。③物事に夢中になって、本心を失う。放心する。ぼんやりする。ぼうっとする。④もっぱらそればかりする。ふける。はまる。（用例省略）

平安時代の作品では、「おぼほる」に比べて「おぼる」用例はごく少なく、しかも、「涙」または「水」におぼる例がほとんどである。以下に「おぼる」の例を示す。続けて中世王朝物語の用例も示す。

〔平安時代の作品〕¹¹⁾

- 1 『源氏』いかばかりものを思ひたちて、さる水に溺れけんと思しやるに（⑥228頁）
- 2 『浜松』と見るままに、涙におぼれて覚めたれば、夢なりけりと思ふに（398頁）
- 3 『狭衣』その片端をだに言ひ尽すべうもなければ、ただ涙におぼれて（①59頁）
- 4 『狭衣』ただかの夜半の月影変らざりけりと見ゆるに、涙に溺れて（②118頁）
- 5 『栄花物語』後々の御事…思し掟てさせたまふにつけても、殿はただ涙におぼれて（110頁）
- 6 『栄花物語』そこらの女房涙におぼれたり。（350頁）
- 7 『栄花物語』仕うまつらせたまひて、涙におぼれさせたまへり。（353頁）

〔中世王朝物語の用例〕

- 8 『在明の別』月さへいたく臙れて、物暗き常盤林の程、少納言は、しづ心なく仏をぞ念じ聞ゆる。（集成380頁）
- 9 『あさぢが露』姫君は、ただ、いかなる恐ろしきものなどの取り持て去ぬるぞと思ふに、現し心もなく、消え入るやうなるに、君は、気近き気色、涙におぼれたるさま、うつくしきなどの、夢かと思さるるに、更けにける夜の鐘の音も遅しとも待たれ給はぬに、都よりもとく、

たびたびこかしことおどろかし顔なる鶏の音のつらきに、御供の人々もうち声づくり、大路の車の音もしげく聞こゆるに、御心あわたたしく、見捨てて出で給ふべき御心地もせず。

(200 頁)

10『あさぢが露』わが身世づきて見え奉らんだにうち出でにくき御有様を、いかに見聞きあらはし給ひてかくまでもたづね給ふらん、と思ふに、う□出でん方なく、涙におぼれ□□(姫君)「夢現とも思ひ分かれ侍□□身の有様を、誰にと□□□となくて、月日の行方だに□□侍るに、かやうにのたまはするも、え□□思ひ分き候はね」とて、うちしほるるけはひ気色など見る目の有様に変はることなし。(283 頁)

11『苔の衣』〔用例 1〕

12『苔の衣』「またはいつかはかばかりの夢の中の対面も」と思し続けるままに、今一際思ひ添ひぬる心地して、一つ涙に溺れ給ふさま御身も浮きぬべし。(219 頁)

13『苔の衣』〔用例 2〕

14『我身にたどる姫君』ほどもなく、うち御覧じあけつる御心地、頼もしうもかなしくも、いかばかりかは。御諫めにはなぬ涙はいとどこぼれ落ちて、御覧じ出だせば、月は空の仲につゆ曇りなく澄みのぼりて、いと静かなるに、急ぎ渡らせ給ひて見奉らせ給へば、上もいみじき御けしきにて御涙におぼれてぞ (189 頁)

15『小夜衣』(中陰明け) こかしこに群れみつつ、泣きあふ気色ども、見給ふに、出でもやられ給はず。我も、月頃の名残おぼし続けるに、御袖もひき放し給はず。まして大殿・上などの御気色、いふはかりなし。「あはれなる御消息かな」と聞き給ふにも、げに御心どもおしはかられて、御返りも聞こえやり給はず、涙におぼれ給へるを、人々も、あはれに見奉る。(159 頁)

16『山路の露』母君、うちみるより心まどひして、物もおぼえねば、たゞむせかへるばかりなり。いく程のとし月もへだゝたねど、ありしにもあらずおとろへて、さしもきよげにふとり過たりし人の、おもがはりするまで成にけるをみ給ふに、姫君の心のうち、たゞ我ゆへならんかしと、つみえがましく覺ししられて、いみじうなき給。うこんも、よそにて思やりきこえつるかなしさは物の数ならず、みたてまつるにめもくれて、こゝにては今一しほ泪におぼれあり。(集成 444 頁)

17『兵部卿物語』(宮) しのびやかにわらはせ給ひつゝ「かうおもひそめてしより、はやとしつきといふばかりにや、やうやうなりゆくを、けはひまでもしるからんものを、あまりおぼれたるさまにもてなすこそうたておぼゆれ。(集成 32 頁)

一見して「おぼれ」の形をとるものは、ほぼ「涙に」溺れている。また、「夢路」を「たどる」「まよふ」主体が男である場合が多かったのに対して、「涙に」溺れる主体は女である例が多い。用例 9『あさぢが露』はまさに密通場面で、通ってきた男の眼からとらえた女が泣いている様子である。用例 17『兵部卿物語』も、同じく密通場面で「涙」がない例として注目できる。男(兵部卿宮)が「おぼれたるさまにもてなす」女に対して長年の恋情を訴えかけていることばの中にある。理解して応えてほしいのであるから、「おぼれ」たるさまは、男の期待にはそぐわない実態なのである。ここには「涙」という言葉こそ無いが、「おぼれ」ている実態というのは、恐れや驚きで泣き続けていたということではないかと想像される。

さらに中世以降の他ジャンルの用例を見ると、「おぼる」が「涙」もしくは「水」に溺れる用

例が多いのが一目瞭然である。以下に示す。

- 18『陸奥話記』或いは高岸より墮ち、或いは深淵に溺る。(163頁)¹²⁾
- 19『平治物語』下なるは水に溺れて助からず。(419頁)
- 20『徒然草』名利におぼれて先途の近き事を顧みねばなり。(141頁)
- 21『平家物語』おしおとされ、水におぼれてながれけり。(316頁)
- 22『同』水におぼれて死なば死ね。いざわたしん(320頁)
- 23『同』馬いかだおしやぶられ、水におぼれて六百余騎ぞながれける。(323頁)
- 24『同』秋の月はやく五重の雲におぼれ、(416頁)
- 25『同』水におぼれても死に、矢にあたってもうせぬらん。(260頁)
- 26『同』野山のすゑにて死に海河のそこにおぼれてうするも、皆これ前世の宿業(341頁)
- 27『海道記』半百の浪におぼれて、一滴の水菽、未だ汲まざる事を。(74頁)
- 28『宇治拾遺物語』これを取らんと走る者は、水に溺れて死ぬ。(216頁)
- 29『同』いかに汝、水に溺れて死なんとせし時、(227頁)
- 30『十訓抄』ますます悲涙におぼれて、帰路にまどひけりとなむ。(141頁)
- 31『同』虞舜の帝の後妃、皇英二人ながら、湘水の底におぼれ、(246頁)
- 32『沙石集』痴愛の水に溺れて哀傷の炎こがれて、輪廻の苦絶えざるなり。(189頁)
- 33『太平記』人馬ともに橋の上より閑落されて、水に溺るる者の、その数を知らず。(294頁)
- 34『同』百万の士卒河水に溺れけんも、これには過ぎじぞと覚えける。(475頁)
- 35『同』人の心の欲の海に溺れぬる事、あに迷へるにあらずや。(585頁)
- 36『同』荒き浪に推し落されて、水に溺れて徒らに失せ給ひけるこそ糸惜しけれ(140頁)
- 37『同』五百余人の兵ども徒らに水に溺れて失せにける。(198頁)
- 38『同』水に溺れて死傷する物、その数を知らず。(201頁)

一覧してみると何に溺れるかという点で、用例20『徒然草』はやはり特異なものであることがわかる。用例32『沙石集』や用例35『太平記』も人間の欲望という共通点があるものの、論としての「水」や「海」という語を伴う。このあと近世に至ると、「仮名草子」や「浮世草子」、西鶴や近松作品の中にも、愛欲や利欲など欲望におぼれる例が増えていくが、中世においては、まだ希少な例としてよいだろう¹³⁾。

5. 「おぼほる」が涙を省略するとき

さて、「おぼる」の古形である「おぼほる」のほうはどうだろう。平安時代の用例では、『蜻蛉日記』1例、『源氏物語』12例、『紫式部日記』2例、『浜松中納言物語』2例、『狭衣物語』2例、『栄花物語』6例、『とりかへばや物語』2例である。また、中世王朝物語においては、『在明の別れ』1例、『石清水物語』1例、『いはでしのぶ』1例、『わが身にたどる』2例、『風につれなき』1例、『八重葎』1例である。「おぼる」同様、「涙」に「おぼほる」例が多いが、ぼんやりと物思いにふける状況ととらえられる例もある。ここでは、直前に「涙」の語がなく、しかも密通との関わりで注目したい例をとりあげておきたい。

『源氏物語』若菜下巻で、柏木が押し入った後の女三の宮の描写に、

宮は、いとあさましく、現ともおぼえたまはず、胸ふたがりて思しおぼほるるを（④226頁）

とある。また『狭衣物語』で、女二の宮が狭衣の気配を感じて逃げる場面、

人気の少し近くおぼえて、あさましとおぼほれし夜々の匂ひ変らずうちかほりたるに、あやしと御髪をもたげたまへるに、または見じと思し離れし夢の名残にやと心地も惑ひて、なえたる御衣ひとつをたてまつりて、御帳のうしろにすべり出でさせたまふも、わたわたとわななかれて、とみにもえ動かれさせたまはざりけり。（①235頁）

狭衣の気配を感じたのは、かつての密通の記憶ゆえであり、それは「おぼほれし夜」として回想される。さらには、二度と会いたくないと思ひ離れた「夢」と言い換えられる。密通が、受け身の女の側から「おぼほれ」た記憶として書かれていることに注意したい。

また『とりかへばや物語』で、宰相が四の君に密通する場面。

けはひのあらぬに、あさましとあきれて顔を引き入れたまふを、かき抱きて、帳のうちに率て入りぬ。「やや」とおぼほるやうにしたまふを、207頁

この部分、新編全集の頭注には、「「おぼほる」は、惚けて何もわからなくなる。」とあり、宰相に無理やり帳の中に引き入れられた四の君の動揺の様子と解されている。

こうした用例は、「おぼほる」全体の中ではごく限られた例に過ぎないが、いずれも、密通直後の女の側の動揺をあらわしたものとして、『苔の衣』の女御の心中に近いものと思われる。

小学館の「古語大辞典」は、意味として「①おぼれる。②涙にむせぶ。③ぼけて何もわからなくなる。正気を失う。」を示したうえで[語誌]に

大言海は、「おぼほる」を二語に分け、一つは「溺」、他は「惚」の意とする。一単語として統一することが困難である点は確かに認められる。③は万葉語の形容詞「おほほし」と関連づけられようから、たとえば「涙におぼほる」が涙に浸って物事を弁別しえなくなる意となり、やがて②の意、さらに①の意を派生したとみることもできる。①の用例が日本書紀古訓などにみえるが、これを中古語の投影とみれば、①の意を原義としなくてもよい。

と記している。『苔の衣』の用例は「おぼる」ではあるが、むしろ「おぼほる」の用法を認めたほうがよいように思われる。加えて、「おぼほる」はたとえば『浜松中納言物語』の「夢路にまよふ」例に通じる様子でもある。『苔の衣』にもう一例ある「夢路に迷ふ」例が、主体が女であり、これも『浜松中納言物語』に極めて近い用法であることを考え合わせると、「夢路にまよふ」と「おぼほる」は極めて近い意味内容として認識されていた可能性もある。

現状の伝本では、「夢路におぼる」は、兵部卿宮の願望の結実である「夢路」（＝密通）の結果、涙に浸って何もわからなくなった女御の心境ととらえるのがよいのではないかと考える。

おわりに

「夢路」は、和歌においては、現実には結ばれ難い男女の逢瀬をかなえる回路としてロマンティックな幻想を表現したが、物語においては、必ずしも男女の恋愛にまつわる幻想に限ったものではなかった。中古の用法としては、「死」など大きなタブーによる衝撃を受けたあとの心情の比喩としてあらわれる。しかし、『源氏物語』は〈禁忌〉の逢瀬を「夢」にたとえて表現し、それに続く『狭衣物語』は「夢路」に密通の喩としての意味を持たせた。〈禁忌〉のテーマの重さが、「夢路」なる語が担う「衝撃の大きさ」に迫いつき、『源氏物語』の「夢」表現を『狭衣物語』が昇華させたと言ってもよいかもしれない。

中世王朝物語の諸作品は、『源氏物語』など王朝物語の影響を強く受けて創作されている。一方で、その構想・表現には中世の時代性を反映したものが見えるのも事実である。

このたびは、『苔の衣』にあらわれる特異な表現「夢路におぼる」について考察した。〈禁忌〉をテーマにした物語における「夢路」は、多くは「たどる」「まどふ」ものであり、恋の主人公たる男の側からとらえた密通を象徴的に表わす場合があった。対して、『苔の衣』の「夢路におぼる」用例は、女の側から密通をとらえた文脈にある。「おぼる」は直後の放心状態を「おぼほる」とした平安時代物語の例から導き出されたものと考えるのが自然であると考えに至った。『苔の衣』が『狭衣』の影響を強く受けた作品であることを再認識するとともに、「おぼる」については、中古語の用法を守っていることを確認できた。

注

- 1) 小木喬『鎌倉時代物語の研究』（東寶書房 1961）は入集歌数の少なさから『風葉集』直前の成立とされる。今井源衛『中世王朝物語全集七 苔の衣』（笠間書院 1996）はその解題において、『林葉集』883 歌の引歌の可能性を根拠として成立上限を 1271 年を 20～30 年遡る可能性をも示した。また、異説として、山田和則『『苔の衣』成立論—改作仮説と二条太皇太后宮礼令子サロン—』（『国語と国文学』第 81 巻第 10 号 2004）は、『風葉集』所収歌の考証により、古本『苔の衣』の存在を想定したうえで、古本の成立は『艶書合』前後に遡る可能性と肥後が作者である可能性を示した。
- 2) 『苔の衣』本文引用は『中世王朝物語全集』により、同書の頁数を付す。
- 3) 国文学研究資料館『古典籍データベース』において公開されている画像を確認すると、〔用例 1〕〔用例 2〕の当該部分は以下のようにになっている。〔用例 1〕を①、〔用例 2〕を②で示す。
盛岡公民 ①おぼるゝ ②おぼえられし
筑波大図 ①をほるゝ ②おぼれられし
東大国文 秋巻のみ
書陵部 20-438-2 ①おほるゝ ②おほれられし
書陵部 20-609-5 巻一のみ。当該部分ナシ。
青山歴史村 ①おほるゝ ②おほえられし
肥前松平文庫 358-40-2 ①おほるゝ ②おほえられし
京都市歴資 ①おほるゝ ②おほえ（れい）られし 朱傍書アリ
- 4) 『日本国語大辞典』（小学館）
- 5) 和歌の引用は『新編国歌大観』（角川書店）による。
- 6) 『歌枕歌ことば事典増訂版』（片桐洋一・笠間書院 1999）
- 7) 歌語「夢の通ひ路」は『古今集』の敏行歌以降、八代集では、『千載集』に一例、『新古今集』に

一例あるのみである。敏行は「夢の直路」も詠んでいるが、これも固有の例である。

また、『伊勢物語』においても、歌語としての用例が一例ある。「五十四 つれなかりける女／むかし、男、つれなかりける女にいひやりける。／ゆきやらぬ夢路を頼むたもとは天つ空なる露や置くらむ」(159頁)この歌は『後撰集』に類歌がある。一方、歌語の使用例を中世まで広く見渡すと、「夢路」は『新古今集』以降の勅撰集では『新勅撰』7例・『続後撰』1例・『続古今』3例・『続拾遺』2例・『新後撰』2例・『玉葉』6例・『続千載』6例・『続後拾遺』4例・『風雅』6例ある。「夢の通ひ路」のほうは、『新勅撰』0例・『続後撰』0例・『続古今』2例・『続拾遺』2例・『新後撰』0例・『玉葉』0例・『続千載』2例・『続後拾遺』2例・『風雅』1例と、むしろ14世紀以降のほうが多い。

- 8) 『蜻蛉日記』『紫式部日記』『源氏物語』『更級日記』『浜松中納言物語』『夜の寝覚』『狭衣物語』『栄花物語』『とりかへばや物語』『松浦宮物語』『無名草子』の各作品本文引用は、小学館の新編日本古典文学全集本により、その頁数を付す。また『源氏物語』『狭衣物語』のように複数巻に渡る場合は頁数の前に巻数を①～⑥で示す。
- 9) 中世王朝物語の作品本文の用例検索にあたっては、『鎌倉時代物語集成』(笠間書院)のテキストをもとにしたが、本文引用には、『中世王朝物語全集』(笠間書院)の当該作品が出版されている場合はその頁を付した。集成からの引用の場合は(集成〇〇頁)の形で引用箇所を示した。また、基本的に引用元の本文に従ったが、漢字の宛て方・句読点などに一部改変を加えた場合がある。
- 10) ちなみに、中世以降の他ジャンルの作品では、『海道記』『信生法師日記』『東関紀行』『十六夜日記』『春の深山路』『十訓抄』に各1例、いずれも歌語である。また、『太平記』に5例あるものの、すべて「夢路をたどる心地」または「夢路をたどる御心地」との慣用的用例であった。なお、中世以降の用例検索については、ジャパンナレッジを利用して検索し、小学館「新編日本古典文学全集」の本文より引用した。
- 11) ここでは紙面の都合上、作品名を省略し、『源氏物語』を『源氏』、『浜松中納言物語』を『浜松』、『狭衣物語』を『狭衣』とした。
- 12) 『陸奥話記』の成立は1162年ごろとされ、平安時代の作品である。ここでは、軍記物語の先駆けとしての位置づけを重視し、その他ジャンルの筆頭に掲げることとした。
- 13) さきに拙稿「中世王朝物語における「底の水屑」表現の検討―入水譚の変容をたどりつつ―」(大分大学国語国文学会『国語の研究』44号2019)で入水譚の考察をした際、「底の水屑」表現が軍記物語に慣用的に多く現れることを指摘した。「底の水屑」表現の場合は、同時代の表現からの影響を視野に入れるとき、むしろ軍記物語との差別化の意識が見られると考えた。『徒然草』例が特異な例であるからには、それとの影響関係を判断するには慎重になっておきたい。

A Study of “Yumeji-ni-oboru” in *Koke-no-Koromo*

ANDOU, Yuriko

Abstract

Koke-no-Koromo, one of the Japanese medieval courtly fictions, has a peculiar expression of “yumeji-ni-oboru,” meaning “drowned in the dreams.” I examined the usage of “yumeji” and “oboru /obohoru” in other Japanese medieval courtly fictions and considered how such usage had been available in the works of those days.

As a result, many of the Japanese medieval imperial stories inherited the motif of forbidden love in *Genji Monogatari*, on the other hand, it was confirmed that *Sagoromo Monogatari* is the first work to refer to “yumeji” as a metaphor for adultery. The expression “yumeji” should be regarded to have been influenced by that of *Sagoromo Monogatari*. I also came to the conclusion that “oboru” does not mean that one is absorbed in something, but that it comes from the expression “namida-ni-obohoru”. It means drowning in tears that have been used since the Heian period

【Key words】 *Koke-no-Koromo*, “yumeji-ni-oboru”, medieval court tales